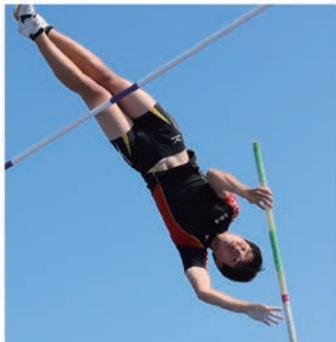


# 進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会

編集 同窓会会報編集委員会

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋4-4-2

ホームページ <http://www.sin-syu.jp/>Eメール [shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp](mailto:shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp)

## 同窓会長あいさつ

会長 小野 治

(高9回)

昨年4月の総会におきまして会長職を拝命してから、早くも1年8ヶ月が過ぎ去りました。この間の様々な活動を通じまして、会員の皆様には、深いご理解と絶大なるご支援とを賜わり、誠に有り難く厚く御礼を申し上げる次第でございます。

6月に「蒼穹」をテーマに開催されました「第78回一高祭」でも、明治期の、西洋の香り漂う木造建築への人気は依然として高く、2日間での旧本館への来場者は、当初の予想を大きく上回って、1,500名を超える結果となりました。展示されている諸史料は、会員各位のご尽力により丁寧に集められ、本会が整備した真新しい陳列台で公開されております。国の重要文化財である旧本館は、NHK・民放を問わず、いろんなドラマの撮影地としても多くの人に知られ、私もが想像する以上に有名になってきております。しかしながら、屋根の天然スレートが落下したり、外壁や内装が剥がれ落ちるなどの問題が生じておりますので、早急な対応が必要だ、と思量いたしております。

本校は、令和9年度に創立130周年を迎える伝統校で、卒業生も37,000名余を数える全国有数の名門校であります。

ます。周年記念事業として、記念式典・記念講演会などを計画されているとのこととでありますので、本会としても、総務・式典・講演会などの委員会を設け、全面的に学校側をバックアップしていきたい、と考えております。

全27普通教室に係る、「本県産のヒノキをふんだんに使った、ぬくもりのある教室」への改装工事は、資材費や人件費の更なる高騰を受け、当初の予定より若干遅れてはありますが、25ヶ月の工期で、再来年12月には竣工の予定であります。「正倉院」のような校倉造りとはいきませんが、ヒノキの、優れた調湿機能・調温作用が、宝物である生徒の心身の健全な成長に幾分なりとも寄与するに違いない、と期待するのであります。

全国的にも誇れる学力水準にまで高められた母校の、更なる充実に貢献出来る同窓会でありたい、と考えます。同窓生同士の絆をより確かなものにし、諸活動を益々活発なものにして、母校を物心両面で支えていける同窓会を目指していく所存であります。

改めまして、母校土浦一高と附属中との益々の発展と会員の皆様の更なるご活躍とをご祈念申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。



## 校長あいさつ

校長 プラニク・ヨゲンドラ

土浦一高進修同窓会の皆様

ナマステー！皆様の母校である茨城県立土浦第一高等学校・附属中学校長のよぎ（プラニク・ヨゲンドラ）です。校長3年目となり、同窓会の皆様のご支援が本校の力強い推進力となっていることに、日々深い感謝を抱いております。

学校全体では、教育活動や進学実績が着実に成果を上げています。生徒は授業に加え、特別活動、探究学習、各種行事に意欲的に取り組み、科学の甲子園、ディベート大会、プレゼンテーション大会、弁論大会、美術展、模擬国連などに挑戦し、誇れる実績を残しています。今後は数学甲子園や生物甲子園にも注力し、次のステージに向けて土台作りを進めていきます。中高6カ年のより具体的な教育計画の作成も進めており、さらに統合的な教育活動を目指します。

附属中学校からは、今年度78名が内進生として高校に進学し、162名の高入生と共に高校1年次がスタートしました。学級は高入生とは別編制ですが、体育や部活動、課外活動は共に行い、2年次からは融合した学級編制を予定しています。高校での単位制の導入も定着し、より多様な学びを提供していきます。

進学実績も向上し、東京大学や医学部をはじめとする難関大学への合格者は増加傾向にあります。また、数名の生徒が海外に留学し、リーダーシップを磨いています。費用面の課題を踏まえ、交換留学制度の導入を検討しているところです。さらに、10月

には台湾への修学旅行を実施し、現地校との交流や企業見学を通じて国際感覚を養いました。探究学習についても、サイエンス、医学、マネジメント、ビジネス、DX（デジタルトランスフォーメーション）、中国語の、6つの専門探究を導入し、選択肢を広げています。

附属中学校においても、授業と特別活動の両輪で成果を上げています。水泳で関東大会に出場し、4位入賞を果たしたのははじめ、県大会において、陸上部は複数の入賞者を出し、吹奏楽部は金賞を獲得するといった、好成績を収めました。さらに科学部も健闘し、海外・国内の学校との交流を通じて多様性を実感しました。

定時制では、今年度も多くの入学生を迎え、口コミでの評判の広がりを感じます。卒業生の就職・進学支援に力を注ぐとともに、NGOとの提携により、地域経営者によるキャリア教育を実現しています。部活動でも健闘し、全国大会での活躍が続いています。定時制においては、4カ年の教育計画の作成を進めており、無駄を省きつつ、生徒が必要とする教育活動の充実に努めていきます。

インフラ面では、普通教室棟や正門周辺の工事が今年度から開始されました。より快適で安全な学習環境を整えています。旧本館については展示室の整理が進み、外壁などの工事も来年度予定されており、2027年に控えている創立130周年記念行事時には、完成した姿を皆様にご覧いただける見込みです。

入学枠の縮小を踏まえ、地域とのつながりを失わぬよう、学校改革や発信力の強化、近隣校との連携に努めています。「不易流行」の理念を大切にしながら、難関大学進学の実績、文武両道の維持、豊富な学びの提供、海外大学進学の推進を目指します。

さらに、生徒一人ひとりの自己理解、セルフマネジメント、リーダーシップ形成といった具体的な成長ツールを整備することも大きな課題です。その実現には卒業生・同窓生の皆様のお力添えが不可欠です。本校では「協力者人財バンク」への登録を進めておりますので、ぜひQRコードからご協力をお願い申し上げます。

今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



## 新任職員紹介

全日制教頭 小松崎 理（高45回）



12年ぶりに母校に戻り、4月のまだ始業式前の日にまず目にしたのは、英語教師を囲みながら、サイドリーダー『動物農場（原書）』を手に熱心に質問を投げかける生徒たちの姿でした。ジョージ・オーウェルの『動物農場』は、かつて私が本校で英語を教えていた頃に生徒とともに読んだ思い出の一冊であり、また、私の高校時代の恩師も、自身が一高生だった際にサイドリーダーとして読み、深い感銘を受けたと語られていた本でもあります。

その後の数か月間、勉学はもちろんのこと、部活動や委員会活動に積極的に取り組み、学校行事を主体的に運営する生徒たちの姿を目の当たりにし、本校の良き伝統が今なおしっかりと受け継がれていることを実感しています。一方で、附属中学生の活躍、海外修学旅行の実施、探究学習プログラムの導入など、本校の新たな挑戦から生まれる「変化の風」も日々感じています。

歴史と革新が共鳴するこの土浦一高において、志高き生徒たちがさらなる成長を遂げられるよう、微力ながら力を尽くしてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。





定時制教頭 町田 徳雄

此の度、本校定時制の教頭に着任いたしました町田でございます。進修同窓会の皆様には、平素より陰に陽に格段のお力添えを賜り、心から感謝申し上げます。

本校は、長い歴史と伝統を有する名門校であり、これまで多くの優れた人材を育てて参りました。創立以来、地域社会に根ざし、教育の質を高める努力を続けてきたことは、私たちの誇りでもあります。特に定時制教育は、様々な事情を抱える生徒たちにとって、学びの場であると同時に新たなスタートを切る大切な場所です。多様な背景を持つ生徒たちに新たな可能性を提供し、彼らが夢を追い求めるための支えとなつていきます。私も教職員は、生徒一人ひとりの自己実現を目指し、可能性を最大限に引き出せるよう温かく支援して参る所存です。

同窓生の皆様は、学校の歴史の一部であり、私たちの教育活動にとって大きな励みとなっております。今後ともなお一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 令和7年度 定期総会開催される

去る4月26日(土)に、令和7年度進修同窓会定期総会が、母校体育館において、周年祝賀卒業生等を含む約520名(昨年より170名余増)の出席を得て開催されました。

総会では、冒頭で、応援指導部のリードの下、吹奏楽部・弦楽部の伴奏に合わせ、校歌を、参加者全員で声高らかに斉唱しました。物故会員に対する黙祷後、小野治進修同窓会会長(高9回)、「プラニク・ヨゲンドラ」校長の挨拶がそれぞれありました。

議事に入り、令和6年度事業報告及び決算報告・別途積立金決算報告、監査報告に続いて、令和7年度事業計画案及び予算案が提出され、全てが原案どおり承認可決されました。最後

に、次年度の総会(令和8年4月25日)について事務局より発表されました。

総会後、大型スクリーン(同窓会から学校に謹呈したもの)を使用し、本会が助成する事業の1つで、今回で13回目となる生徒海外研修SEG(研修期間・令和7年3月16〜24日、訪問都市・ワシントンDC及びボストン)に参加した生徒代表から、その成果・意義について熱い報告がありました。※詳細はホームページ「土浦一高SEG」をご覧ください。

引き続き、以下の学年の卒業周年祝賀式が執り行われ、祝辞を一ノ瀬正樹氏(高28回)が述べた後、以下各回の代表者に小野会長より記念品が贈呈されました。

卒業60周年・高校17回(昭和40年3月卒業) 坂本栄様、同じ

く定時制 高15回(昭和41年3月卒業) 武石進様  
卒業50周年・高27回(昭和50年3月卒業) 嶋田一郎様  
卒業40周年・高37回(昭和60年3月卒業) 島田恵一様  
卒業25周年・高52回(平成12年3月卒業) 横山寛様



卒業15周年・高62回(平成22年3月卒業) 倉内裕史様  
最後に、謝辞を須田義之氏(高27回)が述べました。

祝賀式終了後、それぞれの懇親会は、幹事のお骨折りで、「卒業15周年」・「卒業40周年」はホテルマロウド筑波に、「卒業50周年」・「卒業60周年」は「ローブ」に、「卒業25周年」は「東雲」に移動して開催されました。久しぶりの懇親とあって、各会場は和やかな雰囲気ながらも活気に溢れ、参加者が130名を超える学年もあり、恩師旧友ともども時を忘れてのひとときを過ごしている様子でした。なお、総会の会場設営にあたっては、当日早朝より、生徒・教職員併せて200名余りの協力を得ることができました。ありがとうございました。

(本部事務局長 高21回 助川 博夫)

### 令和6年度 進修同窓会 入会式挙行される

令和7年2月28日、卒業式予行終了後、全日制普通科第77回卒業生に対する同窓会入会式が行われました。コロナ禍で、この数年間は対面では実施されませんでした。前年度より対面での式が復活しました。前年度は大学入試日程の関係で、出席できない生徒が多かったのですが、今年は日程が調整され、6クラス240名の生徒の大部分が出席できました。

冒頭、小野治同窓会会長から、「全国には20余の支部があり、活発に活動しています。卒業後、皆さんも支部活動に積極的に参

加し、同窓会活動に協力願いたい。そのためには本部も援助を惜しみません。」との入会に当たつての歓迎の言葉がありました。

続いて、生徒代表の喜田輝依都(きだきよと)君が、「入会の喜び、生きていく中では、希望・責任の大切さ」を力強く述べてくれました。

続いて小野会長から、代表生徒大久保あかりさんに生徒全員に対する卒業記念品(卒業証書入れ)が贈呈されました。

その後、武井秀一副会長から、生徒会活動功労生徒として、中村尚喜君、松本のどかさん、塚本拓也くん、高崎らさんの4名に功労賞記念品が授与されました。

最後に、評議員1名、学年幹事3名、各組幹事各4名が呼名され、同窓会より、代表喜田輝依都君に委嘱状が手渡されました。

《評議員》 喜田輝依都

《学年幹事》 大久保あかり、

細見拓真、木村瑛人

《各組幹事》 A〜F組各4名

(氏名省略)

委嘱状授与後、更に同窓会より、「卒業後は住所が頻繁に移動することもあるでしょうから、お互いに連絡を密にし、各組幹事は住所録をしっかり作成してください。また、評議員会が年は出席よろしく願います。それでは、15年後の周年祝賀式に元気で会いますよう。」との言葉がありました。

(本部事務局長 高21回 助川 博夫)

## 卒業60周年記念同窓会

坂本栄(高17回)

卒業時18才+それから60年です。進修同窓会の式典に招待されるのはこれが最後です。体育館での祝賀式典、それに続く市内のホテルでの宴会には75人も参加しました。式典ではプーラニク・ヨゲンドラ校長の挨拶を伺い、後輩たちの将来は明るいと思いました。

「世界的に役立つ人材を育成し、自分で設計した方向に強い意志を持って進む、そういう生徒に育てたい。今年度から修学旅行を復活させ、台湾に送り出すことにした。現地の大学や高校のほか、世界的に競争力がある大企業も視察する」、「世の中はこれから劇的に変わる。どんな職業が残りとどんな職業が残らないか、予測がつかない。各



国の競争力が強くなると、日本が今の位置にいられるとは思わない。日本はさらにパワーアップしていく必要がある。土浦一高は県立高の中で常にトップを走ってきたが、より上のレベルに持っていきたい」。

その後の懇親会で何か喋るよいうに言われた私は、どんな話をするか迷いましたが、「高度成長期に放り込まれた私たちは面白い時代を生きた」と、以下のようなことを話しました。

「経済記者になって2年目の夏、ニクソンショックがあった。米国がドルを金に交換させないと言、ドル切り下げに動いた事件だ。これは戦後の雄、米国のパワーの低下を意味した。その2年後にオイルショックが起き、産油国が先進国の秩序に異を唱えた。

日本はどちらも乗り切り、市場で目立つ存在になった。

ニクソンショックのときは大蔵省を担当、オイルショックのときは海運造船業界を担当、自動車摩擦のときはワシントンで日米交渉を取材。米国の衰退と日本の台頭を間近で見られたのはハッピーだった。しかし日本のおごりがバブルにつながった。私も銀行幹部と飲み歩き、彼らと一緒に浮かれていた。バブル破裂のあと、日本の金融システムが意外に弱かったことを知った。

バブル処理で傷んだ日本がその後遺症から脱した今、トランプショックが襲った。他国に市場を荒らされた米国がなりふり構わず反撃に出たわけだが、いずれ大転びする。ポスト米国の時代を迎える好機と思ったらよい。」

## 卒業50周年記念同窓会

嶋田 一郎(高27回)

令和7年4月26日(土)、土浦第一高等学校での進修同窓会総会・周年祝賀式を経て、午後4時から土浦市川口の「ロープ」に於いて、私達第27回卒業生の卒業50周年記念同窓会を開催しました。恩師としてお招きできたのは、飯村弘先生お一人でしたが、同窓生120名弱に出席いただくことができました。

昭和50年3月の卒業から50年の歳月が流れ、思い起こせばオイルショック、バブル景気とその崩壊、東日本大震災と福島第一原子力発電所事故、少子高齢化の進展、新型コロナウイルスのパンデミック、ITやAIの急速な進展・拡大等、社会経済は大きく転換しました。

まもなく古希を迎えるこの時に、母校での総会・祝賀式に続けて同窓会を開催できたことは、人生の一つの節目として大変意義あることと感じたところです。

私達は、卒業25周年の学年同窓会から概ね5年ごとに同窓会を開催してきました。

50周年記念同窓会に当たっては、これを踏まえ、実行委員会を発足させ、須田義之委員長、小坂博事務局長を中心に、卒業時のクラス毎に2名程度の実行委員をお願いし、運営について何度も打合せを重ねて準備を進めてきました。

この打合せで大変有難かったのは、卒業生の名簿管理が大変正確で、住所不明者等の把握を



効率的に進めることができ、お陰様でその後の運営の細部にまで話し合いができたことです。

恩師への記念品をはじめ、同窓生への50周年記念品や会の進行及び二次会等について、委員が納得するまで話し合いができました。

ただ、この準備作業を進めるに当たって、大変苦労された幹事さんもおられたとのことで、そのご労苦に改めて感謝申し上げます。

当日は、卒業以来の同窓生との再会もあり、一高祭や部活動、教室での出来事、恩師からの叱咤激励等に会話が弾み、50年という歳月を超えても和気藹々とした雰囲気溢れ、一人ひとりが楽しく貴重な時間を過ごしていただけたと感じられました。

また、同窓生からの提案を受けて、同窓会の受付の場を活用して進修同窓会会費の納入をお願いしたところ、多くの同窓生から協力が得られましたので、ご報告させていただきます。

最後に、私達の今は、在学時の恩師、先輩、同窓生、後輩との出会い・交流等を通して培われてきたものであり、そのことに心から感謝申し上げますとともに、土浦第一高等学校及び進修同窓会の益々のご発展と皆様方のご多幸・ご健勝を心からお祈り申し上げます。



## 卒業40周年記念同窓会

大久保 博高37回

卒業40周年、まもなく還暦を迎える私たち、いつのまにか当時の先生方の年齢を超えてしまいました。なんとも不思議な気持ちです。

開催の1年ほど前からクラス幹事にお集まりいただき連絡先調査。ご尽力のおかげで総会・祝賀式へ100名、学年同窓会へ130名の出席をいただきました。全国各地、遠く海外からも集まってくれた友、卒業後初めて参加してくれた(40年ぶりの)友に再会できたことはとてもありがたく嬉しく思いました。都合がつかず参加できなかった同窓生からのメッセージにも心に響くものがありました。なんとといっても、井川先生をはじめとして、富永先生、下代先生、村岡先生、武井先生、お元気な先生方に接することができたお蔭で、懐かしく楽しい一日を過ごさせていただきました。残念なことは、10名ほどの同窓生が既にこの世にいないことです。思い出すのは高校時代の姿、笑顔、もう二度と会えないのかと思うと寂しい気持ちにもなりました。

母校、土浦一高へ足を運んでいただきたくて、総会・祝賀式への参加を促しました。当時を思い出したり、変化を感じていただいたり、現役の生徒と触れ



合う機会になればよいなと思いました。吹奏楽部の校歌演奏や応援指導部のエール、SEG(海外研修)の発表など、一部の高校生ではありますが、頑張っている後輩たちをご覧いただけたことと思います。

同窓会の連絡は固定電話・ハガキから、携帯・メール・LINEなどSNSに変わり、出欠確認はグループフォームへと進化した。とても便利になり、変化に追いつけない自分を感じくこともありますが、世の中は進化していきますが、変わらない思いもあります。楽しい思い出を胸に、新しい出会いを楽しみたいものです。

昭和60年卒の同窓生の皆さん、学年の同窓会はもちろん、一高全体の同窓会(進修同窓

会)の出会いも活用して、益々有意義な人生を送って下さいね。数年後の再会を楽しみにしております。

## 卒業25周年記念同窓会

鯉淵 士富子(高52回)

2025年4月26日、一高体育館での周年記念祝賀式には約70名、ホテルグランド東雲での懇親会には、長瀬宗男校長先生(当時)はじめ先生方12名のご臨席を賜り、約120名の集まりとなりました。

開催に先立ち、昨年10月に幹事打合せのため、10年ぶりに母校を訪れました。日向久先生は副校長を務められており、原田晋市先生(当時学年主任)は進修同窓会でご活躍なさっていました。

オンラインで案内が届かない同級生宛に、郵便料金が値上りしたばかりの葉書を100枚以上準備する年末を過ごし、なんとか迎えた当日。

祝賀式の受付では、一高時代からタイムワープしたのかと思うくらい変わらない同級生から、体型も髪型も進化して誰だかわからない同級生までバラエティに富み、開式前から盛り上がっていました。式典の校歌斉唱では「亀城一千の健男児」という、時代を反映する歌詞をなつかしく聞き、応援団生徒によ

る応援披露では川口運動公園での野球応援を思い出しました。式典後に見学した旧本館。ドラマスペシャル「白洲次郎」や最近では朝の連ドラ「あんぱん」にも登場しています。建物内では「一射入魂 土浦一高弓道部OB会」と書かれた濃紺のTシャツを着た銀髪の大先輩にご案内いただき、ご自身で撮影されたという、桜と映る旧本館な



ど何枚もの写真を頂戴しました。その篤い母校愛に深く感謝を受けました。

亀城公園に立ち寄り懇親会場へ。受付で拝受する恩師の先生方からのお祝い、その包みにある先生方の筆跡に、当時の授業風景が浮かんできました。

懇親会の2時間は瞬く間に過ぎ、15年後の周年祝賀式での再会を楽しみに結びとなりました。

この度の同窓会も前回に続き、大内君・高野君に全体幹事として、そして今回(運良く!?)一高勤務の横山君と、進修同窓会の堀金さんには、連絡役として特にご尽力をいただきました。

『なつかしさの心理学』(日本心理学会)によると、なつかしさは孤独感を低減し社会的絆の意識を高めるといいます。近年、孤独・孤立による健康課題に対して「社会的処方」という言葉もあります。同窓会は(心理的)若返り効果たつぷりの時間でした。

今回、仕事や介護、闘病などにより、参加が難しかった同級生もいます。次回は還暦前。多くの同級生・先生方にお会いできることを楽しみにしています。

最後になりますが、土浦第一高等学校・附属中学校及び進修同窓会の益々のご発展及び関係



各位のご健勝と、その基盤となる地域の平和と地球の健康を心よりご祈念申し上げます。

## 卒業15周年記念同窓会

倉内 裕史（高62回）

令和7年4月26日、私たち高62回生は卒業15周年記念として、母校体育館にて開催された総会と式典にて祝辞と記念品を



頂戴し、つづいてホテルマロウド筑波にて先生方をお迎えして懇親会を催しました。

卒業から15年もの歳月が流れ、連絡を取ることは容易ではないと考えておりましたが、クラスや部活動のLINEグループをはじめ、当時のつながりを絶やさず維持してくださった方々のお力添えにより、学年全体の約半数の同窓生と連絡を取ることができ、当日はおおよそ100名が参集した盛会となりました。総会に先立ち、体育館の入口で久方ぶりに顔を合わせた瞬間から互いの近況を語り合い、再会を喜ぶ姿が見られたのは、幹事としても大変感慨深いものでした。

母校体育館での総会では、久しぶりに踏み入る学び舎の空気に、在学時代の思い出が鮮やかによみがえりました。在校生によるSEG海外研修の発表は英語も交えた堂々たるもので、私たちが在学していた頃の力が入った英語教育が、今もなお本校の特色として脈々と受け継がれていることを実感いたしました。プラニク・ヨグエンドラ校長の「人工知能が当たり前となる社会を生き抜く人材を育成する」という方針も、時代を見据えた教育の在り方として心強く感じました。

その後の懇親会は、旧交を大いに温めるひとときとなりました。

た。若い世代なので立食の料理が早々にさばってしまうのは、と心配しておりましたが、全くの杞憂で、むしろこちらが促さなくてはならないほどに、会場全体が会話に熱中していました。ご出席くださった先生方からはそれぞれに近況や教育活動の様子を伺うことができ、特に学年主任であった新井先生の、日ごろから大規模言語モデルを活用しているというお話には、皆驚かされました。校長が語られた「AI時代の人材育成」とも響き合うお話であり、15年前と変わらぬ先生方のご健勝ぶりに大いに励まされました。10年後、25周年の節目にも元気に再会できることを心から願っております。

結びにあたり、今回、総会と記念式典を円滑にご準備・ご運営いただいた進修同窓会事務局の皆様、心より御礼申し上げます。土浦第一高等学校・附属中学校及び進修同窓会のますますのご発展をご祈念申し上げます。

## 卒業60周年に思うこと

進修同窓会定時制部会長

武石 進（定15回）

高校受験に失敗した私は、所謂、中学浪人として目的を見出せず、鬱々とした日々を過ごしていた。受験勉強などした事も

なく、遊び惚けていたので、自業自得である。

そんな中、学年主任のO先生から、一高定時制の二次募集がある事を伝えられ、入学する事が出来た。幸せなことであった。



同窓会より原稿依頼を受け、筆を執ったのはお盆の時であり、初めて、先祖について述べてみたいと思った。私は、以前より千葉県側の京葉道路に我が苗字と同じ「武石インター」があり、何か縁を感じていた。

数年前、本家筋の方から「千葉六党」という言葉を聞いた。調べてみると源頼朝に「父とも思うぞ」と言われた千葉常胤の6人の子供達の事である。三男が武石胤盛で、今回は紙面の都合もあり、次男の相馬氏祖、相馬師常について、ご存じの方も多いたと思うが、書いてみる。彼等は、相馬御厨（松戸・我孫子の付近）を所領した。現在の茨城県では唯一、利根町が北相馬郡にある。北の福島県に南相馬市がある不思議。

閑話休題。その一族が福島現在の相馬市に下向し、地域の平和と安寧とを祈る神事として

始めたのが、一千有余年の歴史を経て今も続く、伝統の祭り「相馬野馬追」である。私も2年前に見学し、その勇壮な姿に魅了された。当時の開催日は7月の猛暑中で、観客も熱中症で倒れる人もいて、救急車の出動する事態であった。昨年から、炎天下での馬の体調への配慮などを理由に、5月末に変更されている。

明治時代の相馬氏では、「新宿中村屋」の創始者、相馬愛蔵・黒光夫妻が際立っている。彼等は彫刻家萩原碌山（30歳没）、水戸出身の洋画家中村彝（37歳没）等の芸術家を援助した。さらにインド独立運動家、ラス・ビバリ・ボース等を匿った。これは国士・頭山満の知遇を得ての事。

よぎ校長が「出川哲朗の充電させて……」のTV番組で彼等に偶然出会った「吾妻庵」には、頭山満の揮毫が掲げてある事を後日校長に伝えた。旧校舎に出川君達を案内しようとする、よぎ校長の営業力！に、感心した次第であった。私も、全国で初めて重要文化財の指定を受けた、母校の旧校舎が未長く維持されてゆく様、進修同窓会の一員として、甚だ微力ながら、お手伝いしていく所存です。茨城県立土浦第一高等学校の益々のご発展を祈念しつつ筆を擱く。



## 支部会だより

## 土浦支部

## 土浦支部総会・懇親会 報告

松井 泰寿 (高21回)

令和6年11月17日、総会・懇親会が「ホテルマロウドつくば」で開催され、86名の同窓生が旧交を温めました。

土浦支部の活動は、1902「明治35」年に遡ります。同年3月28日、卒業式を終えた中学1年生32名により、卒業生相互の親睦協力と、母校の発展を目的とする同窓会規約が作られ、年2回会合を開くことが定められました。その後、土浦では、第1回卒業生の秋元梅峰氏(市内神龍寺住職・土浦花火大会の創始者)らを中心に活動が続けられていましたが、創立当初は卒業生が毎年40〜50名位であり、従って同窓会への出席者も少なく、次第に有名無実のものとなっていました。

しかし、昭和初期に、在京土浦中学校同窓会が結成され、海軍主計中将武井大助氏(中3回・歌人。歌会始の召人も務めた)を中心として、毎年総会が開催されるようになりました。この在京同窓会に刺激を受け、地元を中心とする同窓会結成の気運が高まり、1937「昭和12」年4月22日、創立40周年記念式典が挙行された際に、全体同窓会結成が決議され、満場一致で議決されました。かくて同年10月24日に、全体同窓会の発会式が挙行され、会名を「進修同窓会」とし、初代会長には陸軍大佐小野木仙吉氏(中1回)が選出されました。

これにより、在京土浦中学校同窓会をはじめ、各地域の同窓会は、東京支部などの支部として、進修同窓会に包摂されるに至り、土浦町の同窓会は土浦支部となり、現在に至っています。そのため、土浦支部の区域は、1940「昭和15」年11月3日に土浦町と真鍋町が合併し、土浦市が発足した後も、旧土浦町域のままで続いてきました。今回、規約作成に当たり、その区域を、ほぼ旧土浦町に重なる土浦第一中学校通学区と明記しました。

会員資格は、①・居住地、勤務地、出身地のいずれかが、土浦一中通学区にある者、②・幹事が推薦し、支部長が承認した者、とし、より多くの同窓生が集えるようにしました。

定刻15時、小野(岩瀬)富重氏(高21回)の司会で、総会が始まりました。小原芳道支部長(高21回)を議長に選出し、議事に移りました。幹事長・松井泰寿(高21回)より、規約案が示され、原案どおり、満場一致で可決されました。

続いて役員選出に移り、支部長に小原芳道(高21回)、副支部長に大久保博(高37回)、幹事長に松井泰寿(高21回)、幹事に小野(岩瀬)富重(高21回)、黒田喜文(高21回)・高橋優(高21回)・淀縄聡(高34回)・大沼義明(高36回)・山田哲也(高43回)・鈴木一央(高44回)、監事に鶴田一郎(高20回)・川崎隆義(高26回)、顧問に青山和義(高8回)・小野慶一(高10回)

の各氏が、それぞれ選出されました。

続いて、好文亭梅朝師匠(本名佐藤弘道、高31回)の落語独演会。演目は「禁酒番屋」。プロ顔負けの語り口で、江戸の侍と町人を見事に演じ分けていました。酒癖のくだりでは、身につまされた酒飲みもいたようです。

その後、会場を移しての懇親会は、定刻16時開会。司会は引き続き小野氏。小原支部長の挨拶に続き、プラニク・ヨゲンドラ校長と小野治同窓会長(高9回)から、それぞれご挨拶を頂きました。

小野慶一顧問(高10回)の音頭で乾杯。出席者の最長老は、土浦中学最後の入学生となった福田正氏(高4回)、最年少は金子敏明氏(高59回)。先輩、後輩、半世紀に亙る各回の面々が席を同じくしましたが、真鍋台で学んだ者同士、心は一つ、「階段教室」「一体操」「仮装祭」「リアリティコンテスト」「野球応援」と、青春の思い出が甦り、時の経つのを忘れて話が弾みましました。

最後は、福田正氏(高4回)のリードで、校歌を「沃野一望数百里……」から「……亀城一千の健男児」まで、高らかに歌い上げ、閉会となりました。



## 真鍋支部

真鍋支部長・高山了(高18回)

令和7年5月18日(日)、土浦市内「ホテルマロウドつくば」で、総会・懇親会を開催しました。132名と過去最高の参加者。

渡辺大輔(高51回)、ゲスト・藤枝アルパ奏者によるウエルカム演奏で始まり、懇親会は、よぎ校長による講演「インドの歴史・文化と現在・将来」、鶴巻先生の米寿祝い、初参加者35名が4組に分かれその壇上での自己紹介と続き、大いに盛り上がり、懇談と笑いの輪が広がりました。



真鍋支部は、平成28年までは、高齢者男性30名程の支部活動でした。8年前の平成29年、根本的な見直しを実施しました。

真鍋支部活動の目的を「同窓生が『繋がり、広がり、楽しむ出合いの場』を提供させて頂く」とし、役員は全員でそれを実現する裏方、おもてなしに徹する。

「対等で上下・利害関係なく自由」「政治・宗教・商売は持たない」とし、何より「人ボッチを出さない」をモットーに、オープンで多様性のある支部活動に変えました。又、気楽に誰でも参加できる様に、徹底した経費節減で年会費無し、懇親会費も今や1万円時代の中、7千円で頑張ってきました。が、今年は物価高騰でやむを得ず8千円にさせていただきました。

初回の平成29年は、一気に98名の参加で、若い世代、女性参加も急増。その後は120人前後の参加者で「出会いと縁の輪」が年々広がっています。

土浦一高は県立高校なので、地域の皆様の県民税に支えられています。そこで、同窓生だけの狭い活動だけでなく、地域社会にも何かお役に立てないか、との思いで、コロナ禍3年目の令和4年に、母校同窓会館内で「真鍋寄席」を無料(投げ銭方式)で試行開催しました。

コロナ禍3年目で、支部総会も中止。二方漸く家も寄席がなくなり死活問題。そこで、志の輔師匠二ツ目筆頭同窓生・立川志のぼん(高47回)、社会人落語家好文梅朝(高31回)さんに提案。



第4回真鍋寄席(令和7年10月)

「母校で落語しませんか!」。飲食無しで、「三密回避」し感染対策もし、観客60名に限定。「真鍋寄席」を実施しました。大変好評で、翌年は会場も広いアリーナにして、取手出身の柳亭市寿(柳亭市馬師匠筆頭二ツ目)のゲスト参加で2回目を実施。地域の皆さんも多数参加され120名。

第3回令和6年から、同窓生渡辺ケイナ(高51回)、根本マリサビアノ(高58回)の演奏も加え、160名参加。今年第4回は10月に200人。着実に地域の皆様に、旧本館見学と併せて、定着し始めてきました。

県南地域の同窓生の輪が更に広がり、地域の皆様にも多少お役に立つ支部活動ができればと思っています。

## 恩師からの便り

## 母校での思い出 齋藤勝先生(高15回)

(昭和48年4月〜昭和62年3月  
平成12年4月〜平成15年3月在職)

## 母校に赴任

私が高校教師となり、母校に赴任したのは、昭和48年、28歳の時でありました。

10年ぶりに母校に戻ると、高校時代に教えていただいた先生は、1年と3年の時の担任の横田尚義先生と、2年の時の担任の矢口四郎先生のお二人でした。学年主任の稲見敏雄先生は入れ違いに退職され、離任式にお会いして励まされた事を懐かしく思い出します。

さて、赴任して最初に驚いた事は、いきなり3年生の担任に当てられていたことでした。教務主任の横田先生に話すと、「大丈夫、出来ますよ」と軽く言われ、26回生との担任生活が始まりました。

そして29回・32回・35回・38回の生徒を担当として送り出しました。

## 遠藤校長の赴任

2年目に、県教育委員会の

教育次長から、遠藤俊夫先生が校長として赴任されました。

最初の職員会議で、遠藤校長は、この様な話をされました。

「長野県は教育県で、長野高校、松本深志高校など優秀な高校が4校もある。例えば東京大学への合格者数で見ると、茨城県の高校全体を併せても、長野県の4つの高校の1つにも及ばない。私は土浦一高を日本一の高校にしたい」と述べられました。

その時は、夢物語のような話でしたが、おそらく先生方の頭の片隅に残った事でしよう。次の年度の始め、教員の異動が発表されると、一昨年は赴任者の中で私が最年少でしたが、その年は、私の高校時代の同級生が最高齢で、新採が2人、その他の先生も全員20代でした。何となく学校が若返ったように感じられました。

## 共通一次と一高祭

昭和54年の共通一次に向け、学校行事も変わりました。

9月末の学園祭は6月に移り、6月に行っていた水戸一高との交流戦は、本校から一方的に無期限延期として止め、その代わり9月に一高オリンピックを行う事になりました。歩く会

が10月で、生徒会行事は一高祭終了後、全て2年生主導で行われ、3年生は100日以上早く受験勉強に集中できるようにになりました。

生徒にとって、一大行事はやはり学園祭で、一高祭の準備期間に入ると異様な盛り上がりを見せます。赴任して最初の一高祭の時、担当の飯村弘先生の獅子奮迅のご指導ぶりを見て、この係だけはやりたくないなあと思いましたが、でも断ることの苦手な私は、29回生の2学年の時から、32回生・35回生と3回も担当することになりました。生徒たちと触れ合い、対等の立場で意見をぶつけ合い、一緒に成し遂げることに、私も喜びを感じようになつていったのだと思います。

当時の一高祭は委員会が主催して、他は部活の発表でした。委員会主催には合唱祭・演劇祭・ディベート・家族に扮装した歌合戦・担任の像コンテストなどその年により種々ありました。男生徒による美人コンテストもあり、珍しいと民放TV局が2社取材に来たこともありましたが、でも数年して、よその学校がやりだすと止めてしまいました。

歩く会も先輩たちがやったコースはやらす、常に新コースを開拓していました。伝統を守りながら新しいものを作り上げようとする一高生の姿が見られます。(担当教師は苦労します。)

## 自習ゼロに

私が一高生だった頃は、先生が急な出張・病欠などで、授業が自習になる事がありました。

すると生徒は自習になる時間を6時間目に下げてもらい、帰宅したり映画館に直行することが出来ました。生徒にとって自習は至福の時間だったのです。

その自習時間が何時の間にか無くなってしまいました。穴があくの待ち構えている教師もいれば、遅れを取り戻そうと必死に授業を貰おうとする教師もいて、職員室の時間割ボードに、「2Aの授業が欲しい」などと書かれた紙が貼られるようになりました。高校3年間一度も自習時間を経験しないで卒業していくのが普通になりました。

生徒会係を卒業して、私は教務部に配属になりました。そこで、3月末の時間割編成作業に加わりました。高野大二郎先生や村松輝美先生が中心になり、同一教科は、午前・午後にはバランス良く配置し偏りをなくす。体育の授業はできるだけ1時間目は避ける。体育の次の教科は同じ教科にならないようにするなど、3日間かけて作成します。コンピュータ任せにせず、細心の注意を払う。その仕事の緻密さに頭が下がる思いでした。

## 公立高校日本一

昭和61年、41回生を担当した時、生徒の変化を感じました。成績上位者の層が厚くなったと思いました。つくば市や常磐線沿線の人口増を吸収しているのだと思いました。

昭和62年に私は竹園高校へ転出しました。

竹園にいる私にも、進学状況は伝えられました。

そして平成9年に43人の東大合格者を出し、公立高校で日本一に輝きました。

遠藤校長先生の願いが叶えられたと思いました。

## 再び母校へ

平成12年、教頭として再び母校に赴任しました。

最初の1年は定時制の担当でした。本校の定時制は人気が高く、定員割れありません。

当時は私より年長の方が3人在籍しており、何より和やかな雰囲気、新入生も安心して学校に溶け込めるようでした。

生徒は夕方廊下で会うと、「お早うございます」と挨拶して教室へ向かいます。中学まで不登校と言われた生徒の大半が、明るく登校していました。高校を無遅刻無欠席で卒業し、短大へ進学した生徒もいました。高校で知り合い、年の差のある同級生が、卒業後結婚した事もありました。夫の実家のある大分県に戻り、律儀に毎年、年賀状を寄こします。子供と一緒にの写真などを見ると2人は良い相手と巡り合ったなと思います。

その後2年、全日制を担当して、平成15年に私は伊奈高校へ転出しました。

熱意のある先生方と、素晴らしい生徒諸君に恵まれ、心から感謝致しております。



## 卒業生レポート

「寄り道、回り道の先で巡り会った、万博プロデューサーという仕事」

石川 勝 (高34回)



今年、大阪で2度目となる万博が開催された。4月13日に開幕した大阪・関西万博は、会期184日間を無事に終え、10月13日に華やかに幕を閉じた。165の国と国際機関が参加し、2900万人の来場者が訪れた大阪・関西万博は、内容的にも興行的にも概ね成功を収めたと言つて良いだろう。

その万博だが、大阪で万博が開催されるのは55年ぶり、戦後同一都市で2度の万博が開催されたのは大阪が唯一だ。万博では国際条約が交わされていて、その国際事務局(BIE)に加盟している国は181ヶ国に上る。大阪・関西万博は、この条約に定められた万博の中で、最も規模の大きい登録博というカテゴリーに属している。登録博は5年に1回開催されることになっていて、開催地はBIE加盟国の投票によって選ばれ、多くの国が万博誘致を競う中で、大阪が2度目の開催地に選ばれたのは極めて特別なことであり、誘致に力を注いでくれた方々の努力の賜物なのである。私は、そうした人々からバトンを託される形で、2020年7月に万博の会場運営プロデューサーに就任することとなった。この2020年は、新型コロナウイルス感染症の世界的大流行が始まった年であり、世界中でロックダウンが行われ、外出や移動が制限されて、街から人の姿が消えてしまうという、過去に経験したことのない異常な状況であった。そんな中で万博のプロジェクトがスタートしたのである。

大阪・関西万博のテーマは「いのち輝く未来社会のデザイン」だ。まさに「いのち」を深く考えさせられることとなったこのタイミングで開催する万博をどのような形にするか、私と同時にプロデューサーに就任した他のプロデューサーと共に、何度も議論を重ねて万博の基本計画を練り上げていった。映画監督の河瀬直美さんやメディアアーティストの落合陽一さんら8名のテーマ事業プロデューサーはそれぞれの専門分野から「いのち」を解題し、各自が1館ずつ設けるテーマ館の計画へと結び付けていった。会場デザインプロデューサーとなった建築家の藤本壮介さんは万博会場のデザインへと結び付けていき、私はプロデューサーとして、来場者サービスや会場管理、観客輸送、入場券計画、広報、海外出展勧奨、企

業参加、市民参加など万博のソフト面全般に万博のテーマを結び付けていった。何度も緊急事態宣言が出されて人々が家に閉じこもっている最中に、大勢の人が集まる未来を想像することは容易ではなかったが、当時の異常な状況はいつか収束すると信じ、暗闇から抜け出した先の新たな世界を描くことに私たちは集中した。

基本計画発表後、4年3ヶ月かけて開幕に向けた準備を進めてきた訳だが、その間に万博を取り巻く社会の空気は大きく変化した。当初は歓迎ムード一色だったものが、やがて時が経つと批判的な意見が出始めて、瞬く間にSNSはアンチ万博で溢れ返り、これと呼応してマスメディアも万博に対するネガティブ報道を繰り返すようになっていった。万博を取り巻く世論は一変してしまつたのだ。プロデューサーへの風当たりも強くなり、SNSで激しく攻撃される人も現れるようになった。私は政府や自治体、経済団体などから万博に関する講演を依頼される機会があると、聴衆に向けて万博開催の意義などを訴え掛けてきたのだが、多くの聴衆は理解を示してくれていたので、マスメディアの記者からは批判的な意図での取材を受けることも度々あった。こうした空気感開幕までずっと続き、万博は開催できないのではと考える人も多かつたようだ。

しかし、いざ万博が開幕すると再び世論が反転することとなつた。実際に万博に訪れた人から、SNSで「楽しかった」「また行きたい」といった声が続々と上がり出したのだ。これを受けてマスメディアもそれまでの批判的な報道を一転させ、万博の魅力や見どころを紹介する内容の番組や記事を連日報道するようになった。何が人々の心を惹き付けたのか？それは何と言つても、万博が半年間もの長きに亘り世界の国々が一堂に集まる唯一の催しであるということだろう。国際会議などとは違い、万博では一般の人が楽しみながら世界の国々を知ることのできる工夫がなされている。展示やイベント、飲食などの体験を通じて、さながら世界一周旅行ができてしまうような楽しさが万博にはある。IPS心臓や空飛ぶクルマなどの先進技術、大屋根リングや各国パビリオンなどの非日常感溢れる会場なども大きな魅力となっていた。

母校土浦一高を卒業してから今に至るまで、エリート街道や出世街道といった将来が見通せる場所とはとんと縁がなかった私だが、今こうして社会のお役に立っている所にいられることは、これまでに私と関わってくれた多くの人に助けていただいたお陰だと感謝している。私は大学卒業後、商業施設開発の会社に就職し、2年後に退職して海外に渡った。約2年弱、海外での仕事を経験した後、帰国して広告やイベントなどのコミュニケーション分野のプランニング

会社に入社して就職した。ここでプランナーとしての修行を積み、40歳の時に独立。以後現在に至るまで自身の会社で事業企画やプロデュースの仕事を続けている。2005年の愛知万博ではチーフプロデューサー補佐として関わり、極小ICチップ入場券やロボットプロジェクトなどを手掛けた。この時のご縁で2006年から10年間、東京大学に研究者として在職し、ロボットの産学連携プロジェクトなどにも携わってきた。これまでの歩みを振り返ると、いつも自分の興味や好奇心を優先して、新しいことを求めて寄り道や回り道を繰り返してきたように思う。このようなことができたのは、その時々私に力を与えてくれた人たちがいたからである。中でも高校在学中からの友人の存在は大きい。今でも交流が続いている友人が何人かいるが、これまでの互いの人生を共有している心許せる大切な仲間となっている。その仲間の一人が先日私に言つた。「君の言葉で忘れられないものがある。それは、人生最後に笑った者の勝ちではないよ、笑い続けた者の勝ちだよ」と言われたことだ。

さて、私はどうだろうか？ちゃんと笑い続けられているだろうか？——うん、きっと大丈夫だ。



## 親睦を深めて20年余

飯塚哲哉 (高18回)

## 土浦一高OBゴルフ会の紹介

本会は土浦一高OB/OGで還暦以上の年齢の方なら男女を問わず、どなたでも参加できるゴルフ会です。近年女子生徒の増加があり、OGの参加を見込まれることから、女性幹事を募集中です。また大会名を改めるべきか議論しております。

発足は柔道部OBの有志の発案で、2005年10月21日に第1回目を開催して以来、毎年欠かさず開催してきました。そして本年2025年11月7日には、第21回大会が実施されました。実に20年を超えて懇親を深めてきたことになりました。

昨年の第20回大会は、11月8日、霞ヶ浦湖畔のザ・インペリアルカントリークラブで、合計145名の参加者により、盛大に行われました。近年は気候変動もあって、10月はむしろ雨が多く、開催日を11月に変更してきました。当年も幸い絶好のゴルフ日和に恵まれました。新ペリア方式による競技結果は、優勝が相澤東さん(高20回、写真)、準優勝が篠崎義明さん(高15回)、3位は小沼輝明さん(高28回)でした。団体優勝は高20回組、準優勝は高28回組、3位は高21回組でした。べ

ストグロス賞は相澤東さん(高20回)で76という素晴らしいスコアでした。因みに最高齢の参加者は昭和31年卒(高8回)の米寿直前の皆様でした。



第20回大会の個人優勝者の相澤東さん(左、高20回)

過去20年を振り返ると、コロナ禍の影響で2020年は原則有志のみとなり、懇親会は省略しましたが、この年を除くと参加者は非常に多く、毎年120~160名に及ぶツワモノが集まります。ゴルフ場のキャパシティの都合上、各学年から原則4名、最大12名までをガイドラインとして、団体戦、個人戦を行って参りました。ここで深く感謝申し上げたいのは、毎年奮ってご参加頂いている多くの皆様と、そして裏方の幹事の皆様です。現在の幹事体制は幹事長の鈴木良治さん(高22回)、小野幹夫さん(高23回)、

回)、花上克宏さん(高27回)、斉藤昇さん(高27回)、松本茂夫さん(高28回)、鈴木登さん(高29回)、そして多くの学年幹事の皆さんです。幹事同志の親睦も大切にしており、秋の本大会に加えて、春にも幹事の皆さんで約50名規模の幹事コンペが開催されました。

この四半世紀を振り返ると、日本のゴルフ人口は大きく減少してきました。「レジャー白書」によれば、第1回大会のあった2005年には減少傾向の中とはいっても、まだ1080万人のゴルフ人口であったのが、16年後の2021年には、560万人と実に半減しました。こうしたトレンドの中にあつて特筆すべきことですが、60歳代、70歳代ではそれぞれ120万人、140万人付近を安定して維持されています。当ゴルフ会の参加者数もコロナ禍の影響を除けば、とても安定した推移をして参りました。これはゴルフというものがこれらの世代にとって非常に魅力あるスポーツであるという認識が、ずっと堅持されてきたからと言えるのではないのでしょうか。言い換えると還暦を超えたOB/OGが集う土浦一高OBゴルフ会は、これから重要な役目を持つところになるだろうと期待しているところで

これから人生百年と言われる時代に、毎年新たに還暦となられるOB/OGの皆様に加え、健康長寿を実践する大ベテランの先輩方と共に、益々健康で楽しい親睦の会として歩んでい

ることを、心から楽しみにしております。  
当会の詳細は以下のURLを。  
「<https://to-shin-kai.jindoweb.com/>」

## 特別寄付

定時制OBの広瀬一三さんから120万円のご恵贈がありました。旧本館の理科実験器材展示台の購入に使わせていただきました。

## 会費納入のご協力とお願い

令和6年度会費納入状況は、2,152名の皆様方から6,959,000円を納入いただきました。会費は、各事業項目に充てられますので、ご協力の程よろしく願います。  
振込先 ゆうちょ銀行  
口座記号番号 003440の8の15254  
加入者名 茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会

## 進修同窓会規則(抜粋)

第12条 本会の経費は第10条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。

一、年会費は、6年目以降は、3千円以上とする。  
二、終身会費は、3万円以上とする。

## 令和8年度 進修同窓会定期総会のご案内

令和7年4月26日に開かれた定期総会におきまして、令和8年度にも、進修同窓会定期総会及び周年記念祝賀式を開催することに決定しました。

一、期日 令和8年4月25日(土) 午後1時から

二、場所 土浦第一高等学校体育館

\*卒業周年祝賀式該当学年

卒業60周年 高18回 定16回

卒業50周年 高28回 定26回

卒業40周年 高38回 定36回

卒業25周年 高53回 定51回

卒業15周年 高63回 定61回

一般会員・周年記念該当会員の数多くの方が母校の門をくぐられることを期待しております。



# 母校だより

## 「蒼穹」

第78回一高祭  
運営委員会委員長

3年F組 豊山 結太

大盛況で幕を閉じた第77回一高祭から1年、様々な変革と苦勞と喜びの準備期間を経て、「第78回一高祭」は、多くの来場者が訪れ、大成功を収めました。こうして成功を収められたのも、開催に向けて協力し全力を尽くした一人ひとりの生徒、私たち生徒を信頼し様々な活動に挑戦させてくださった先生方や様々な面で私たちを支援してくださった保護者の皆様や地域の方々のご協力があったことです。改めて、第78回一高祭に関わってくださった全ての方々に、深く感謝申し上げます。さて、広く青い大空を表す「蒼穹」という言葉に「自由」への意志を込めて、第78回一高祭は始まりました。

上を見上げれば天井のその向こうに広がる大空。蒼穹とは、世間や、そして自分の中にもある常識という天井を突き破り、限りのない可能性を信じて向かっていく未来を意味しています。こうしたテーマのもと、生徒全員が最高の一高祭の実現に向けて尽力した結果、ゲートの配置変更や前夜祭での立ち見の復活をはじめとする様々な改革と、工夫に富んだ壁画やゲート、クラス企画などの数々の見所に溢れていました。1日目はあいにくの雨でしたが、多くの人々で賑わい大きな盛り上がりを見せました。2日目については、前日の雨が嘘のように爽やかな晴天となり、会場は、来場者の方々

や先生方、そして私たち生徒など、多くの人々の笑顔に包まれました。第78回一高祭を経て、生徒一人ひとりが「蒼穹」への一歩を踏み出すことができたと確信しています。



## 第48回二高オリリンピック

実行委員会委員長

2年C組 大出紗空

昨年の秋、私たちは、内進生と高入生とが合流し、「一丸」となつて一つの行事を作り上げるという意味においては、土浦一高で最初の委員会として、活動を始めました。中高6学年の全員が主人公として羽ばたけるように、という願いを込めて、「飛翔」というスローガンの下、「イチオリ」史上初めて、中高6学年がともに競技を行い、応援し合える行事を目指し、25人の委員で活動してきました。しかし、夏休み明け、部活動の日程の関係で、中高別日での開催へと変更になり、夢は半ばで絶たれてしまいました。悔しさや挫折感も味わいましたが、気持ち切り替え、残された3週間、高校のみの「イチオリ」を完成させようと再び動き出しました。

トラブルもたくさんありましたが、9月25日、先生方や生徒の皆さんの協力のおかげで、無事



に例年通り、「二高体操」でスタートできました。トラブルの度に申し訳なさも感じましたが、新競技の「借人競争」や復活した「部活動対抗リレー」の効果でしようか、「楽しかった」「最高の思い出」などの声を頂け、率直に嬉しいと思えました。

また、昨年度より競技を3種目増やし、リーグ制も継続したこと、全員が競技に参加でき、全員が主人公として羽ばたけるような行事になったと実感しました。最後に、2年間ずっとそばで支えてくれた、同学年の大好きなイチオリ委員の仲間に、心から感謝の意を伝えたいと思います。「最高の思い出と経験」を、本当にありがとうございました。

## 「歩く会」と共に

第57回歩く会実行委員会委員長

2年D組 坂寄佑奈

10月10日（金）、平沢官衙遺跡をスタートし、小田城跡、旧藤沢小学校、上高津貝塚を経由し、旧本館にゴールするという、総距離、高校23.9km、附属中20.1kmのルートで、第57回歩く会を実施しました。今年度は、「身近な地域の理解を深める」という歩く会の目的をより実感できるように、歴史をテーマとしたルートを作りました。そのため、チェックポイントだけでなく、道中にも古墳や寺、石碑などが多くあるルートになりました。

まず、57人の委員とともに、ルートの作成から企画を始めました。チェックポイントやルートの案が多数出て、なかなか決めることができませんでした。しかし、近隣住民の方々のご意見や、先生、中核となる委員を先頭に全員が一丸となつて頑張ってくれたおかげで、よ

り良いルートを決めることができました。その後も、しおりや看板作成、バスの予約など、さまざまな準備を行いました。

そして迎えた当日。台風の影響が不安でしたが、進路が逸れ、無事に開催できることになり、まずはほっとしました。その後もいくつか運営上のミスはありましたが、生徒全員が誰一人脱落することなく、踏破することができました。これも各施設や各企業のご協力があったからこそだと思い、感謝しています。

終わってみると、この1年間の生活の中心がなくなつてしまい、虚脱感がありますが、多くの人と関わったこの委員会での経験は、かけがえのない大切なものです。今年度の歩く会をもとに、今後は後輩たちが、新しい歩く会の歴史のページを紡いでくれるのを、温かく見守りたいと思います。



## 部活動報告

### ヨット部

2年E組 友保 朝果

創立69年を迎える土浦一高ヨット部





ト部は、現在も霞ヶ浦で日々切磋琢磨しながら練習に励んでいます。部員同士の仲が良く、練習後の部室ではいつも笑いが絶えません。

ヨット競技は、参加艇が齊にスタートし、水上に打たれたマーク（大きな浮き）を定められた順番に回り着順を競うものです。ヨットは帆に風を受け、そのときに発生する揚力を推進力に変えて進みます。そのため、レース中は常に変化する自然環境を予測し瞬時に対応しながら、他の艇に先んじて有利なコースを引くことが鍵になります。体力、技術だけでなく風を読み、他艇よりも早く最適解を出し続ける頭脳も必要とする知的で魅力的な競技です。

今年度は3年生の先輩が、慣れない波やうねりの大きい海での戦いを潜り抜け、見事3年ぶりのインターハイへの切符を勝ち取りました。来年の6月には山中湖で開催の東大会兼インターハイ予選が行われる予定です。この大会で悔いなくこれまでの力を出し切って、先輩に続いてインターハイへの出場を果たせるよう、部員一同日々の練習に励んでいきます。

私たちが自分の技術の研鑽に

集中して取り組めるのは、指導してくださる顧問、コーチをはじめ、物心両面にわたって支援してくださるOB、OGの皆様のおかげだと深く感謝しています。

## 文芸・弁論・哲学部

2年F組 三浦由宇

文芸・弁論・哲学部では、3つの部が連合して活動しています。興味関心やモチベーションによって自由に活動を選択できるのが魅力です。とはいえ創作であれスピーチであれ、自分の考えを纏めた上で最適な表現を追究するという点では共通しているため、自然と部員の気質も似通っており、和気藹々とした雰囲気が出ています。

文芸部の主な活動は個人の作品制作ですが、部員間の交流やインスピレーションの共有のため、昼休みにお互いの作品を批評し合っています。OBの歌人の方を招いての座談会も開催し、創作に向かう姿勢などに刺激を受けました。

弁論部の活動は大会に向けた準備です。国際理解研究発表会では毎年県上位に入賞し、高い意欲や技術が受け継がれています。

哲学部の活動は哲学カフェの開催を柱に、読書会や勉強会、個人による文章表現などを行っています。こうした活動は、一般生徒や同窓生、市民の方々と対象を広げており、哲学部らしい対話の形を模索しています。今後も地域の活動と連携を深め、哲学を発信していくことが目標です。

表現は素朴な人間活動です。そこから生まれる気軽さ、自由さを失わずに今後も活動を続けていきたいと考えます。また、私達が校内外で様々な活動を展開

できるのは、先生方をはじめ、同窓生、地域の方々の支えがあつてのことです。こうしたご支援への感謝を忘れず励んでいきますので、今後とも宜しくお願いします。



## 令和7年度部活動での主な大会結果 (令和7年10月末現在)

### 卓球部

・令和7年度関東高校卓球大会  
茨城県予選 男子学校対抗  
第3位 男子シングルス 第7位

・令和7年度全国高校総体卓球  
県予選会 男子学校対抗 第2位

・令和7年度全日本卓球選手権  
大会ジュニアの部茨城県予選  
男子シングルス 第2位

### 硬式テニス部

・令和7年度関東高校テニス大会茨城県予選会 男子シングルス 第6位

・令和7年度茨城県少年少女テニス選手権大会 男子シングルス優勝

### 囲碁・将棋部

・令和7年度全国総文祭将棋選手権大会茨城県代表決定戦 第2位

・令和7年度茨城県高等学校総合文化祭囲碁大会  
9路個人戦 第2位

### ヨット部

・令和7年度茨城県高等学校総合体育大会兼令和7年度関東大会茨城県予選ヨット大会  
女子コンバインド競技 優勝  
男子コンバインド競技 第2位

・女子420級 第2位 第3位  
男子420級 第3位

・ILCA6級 優勝  
令和7年度県民総合体育大会兼国民スポーツ大会茨城県大会セーリング競技

・少年男子420級 優勝  
少年女子420級 優勝

・少年女子ILCA6級 優勝  
令和7年度第77回関東高等学校ヨット大会兼第66回全国高等学校ヨット選手権大会予選会

・男子420級 第6位  
女子420級 第6位

・女子ILCA6級 第6位  
令和7年度第32回関東高等学校選抜ヨット大会

・女子420級 優勝  
女子ILCA6級 第3位

・文芸・弁論・哲学部  
令和7年度関東甲信越静地区国際教育研究協議会 国際理解研究発表会 優秀賞

・陸上競技部  
令和7年度茨城県高等学校陸上競技大会

・男子棒高跳び 優勝  
女子走り高跳び 第4位

・女子やり投げ 第7位  
女子400m 第8位

・男子やり投げ 第8位  
令和7年度茨城県陸上競技選手権大会

・女子走り高跳び 第3位  
令和7年度茨城県高等学校陸上競技新人大会  
女子400mハードル 第3位

### 弓道部

・令和7年度茨城県弓道個人選手権大会 第8位

・陸上競技部 (附属中)  
第71回全日本中学校通信陸上競技茨城県大会

・男子400m 第5位 第7位  
男子100m 第2位

・男子4×100R 第3位  
令和7年度土浦市総合体育大会 優勝

・女子バスケットボール部 (附属中)  
令和7年度土浦市総合体育大会 優勝

・吹奏学部 (附属中)  
令和7年度第65回茨城県吹奏楽コンクール 中学生の部 B部門 金賞

・《令和7年度  
全国／関東大会出場部》  
卓球部、硬式テニス部、囲碁・将棋部、ヨット部、陸上競技部、文芸・弁論・哲学部、華道部、弦楽部、弓道部

・SEG報告  
「世界の最先端を見て変化した9日間」

2年F組 高松 知輝  
私は、このSEG期間を通して、自分の心情が変化し続けていたことを今でもよく覚えています。9日間をアメリカで過ごし、毎日新しいものに出会う度に、思考が変わるような気がしました。



まず、私がその変化を感じた場所が世界銀行でした。そこでは、現地で働く日本人の方々に質問できる機会がありました。私は、将来像が固まっていなかったため、世界銀行で働くことを決めた経緯を複数の方に尋ねました。すると回答は概ね共通していて、それは、今までのキャリアの自然な流れで到達したのが世界銀行だということでした。当時の自分には驚きで、転職に対する現代の捉え方なども知ることができました。

ボストンでは4つの研究室を訪問し、ここでも新たな学びを得ました。それは最先端の研究に共通して、様々な分野が融合しているということです。現在学校で学んでいる内容は、既に体系化されたものであり、新しい世界を作るには、それらをどう融合するかが重要だと思いました。また、結局のところ、様々な分野が絡むのだから、固定観念に縛られず、自由な発想で考える必要があると感じました。

以上のように、様々な学びを得たSEGでしたが、全行程を振り返って出した結論は、やりたいことをやれるときにやるのが大切だということです。残りの高校生活では、高校でしか得られないチャンス逃さないようにしたいです。最後になりますが、同窓会をはじめとして、このSEGを支援してくださった方々に感謝申し上げます。

## 日本から、その先へ

2年B組 山崎大輔

本校で昨年から復活した修学旅行。今回は初の海外修学旅行として、台湾に10月26日～30日の



5日間滞在しました。  
1日目は、成田空港に午後集合し、出国しました。大きなスーツケースを運ぶみんなの顔には、これから始まる旅への期待感が満ち溢れていました。  
2日目は、2クラスずつの3コースに分かれて、台湾の大学と高校を訪問しました。英語を用いた交流は、日本では得られない貴重な体験となりました。  
3日目は、企業訪問から始まり、言葉の壁に突き当たりながらも、積極的に学ぼうと努めました。その後はクラス別観光を行い、私達のクラスでは十分という街で、願いを書いたランタンを打ち上げました。夕方には学年全体で、九份という街を散策しました。思い思いのお土産を購入したり、鮮やかな街並みを写真に収めたり、と台湾ならではの情景に心を躍らせたようです。

## 附属中学校の活動

獅子奮迅

～附属中学生の活躍～  
教頭 浅野 洋平

開校5年目を迎えた附属中。年を重ねることにそのパワーは高まっていく一方です。4月、大きな希望を胸に五期生が入学してきました。現在の附属中を支える三期生、頼れる身近な先輩四期生とともに、卒業した二期生、二期生を目標にしながら、土浦一高を大いに盛り上げてくれると信じています。

1年生が先輩の凄さを感じるのには、入学してからすぐに行われる「入門セミナー」です。附属中での生活、またはその先の高校での生活について、丁寧に何でも教えてくれる上級生を、尊敬の眼差



しで見えていました。2年生や3年生も、1年生のときに先輩から教えていただいた経験をしっかりと覚えていくからこそ、堂々と伝えることができていると思います。こうして、「次は自分が」という気持ちで芽生え、良き伝統は受け継がれていきます。

土浦一高が誇る三行事の「高祭」でも、獅子奮迅のごとく活躍した附属中学生。学級によっては、高校生にも負けな



いクオリティの高さで来場者大いに楽しませました。「蒼穹」というテーマで開催した高祭。企画運営をやり遂げたその後は、まさにテーマにあるように「青空のように澄み渡る気持ち」になったことでしょう。こうして校内行事にも実行委員会を中心に積極的に取り組んでいます。京都、奈良方面への修学旅行は、かけがえない思い出をたくさん作り、心に残るものとなりました。



賞を受賞しました。土浦一高は地域の誇る伝統校です。附属中も同じように、地域から愛される学校を目指しています。本校高校生、真鍋小学校児童、土浦一中生とともに「挨拶運動」、家庭科の授業で近隣の幼稚園児と交流する「保育実習」等で地域の皆様と積極的に関わりました。また、学校説明会では、実行委員の獅子奮迅の動きが来場者を感嘆させました。





令和7年度は32名の新入生を迎え、入学式を挙行しました。新入生たちは、緊張しながらも、仲間と共に新しいスタートを切る

## 定時制の活動

教頭 町田 徳雄



附属中生は活躍を続けます。応援のほどよろしくお願いいたします。

2～4年生を対象として、「探究」をテーマに、社会で活躍されている方々をお招きして実施しています。



これは、茨城大学の正保春彦先生が提唱されているグループワークで、「人間関係をつくる」、「ソーシャルスキルを学ぶ」、「表現する・共感性を育てる」、「他者理解と自己理解を深める」ことなどについて、楽しみながら学んでいきます。



成長の旅が始まります。定時制の今年度からの新たな取り組みとして、心を開くグループワーク（1学年）、キャリア教育（2～4学年）を行っています。



喜びを感じていました。友人や先生との出会いを通じて、充実した学校生活を送ることを誓いました。これから学びと

令和7年3月の卒業生16名の進路先は、進学5名（内、大学1名、専門学校4名）、民間企業への就職が8名、その他3名です。



◇定通体育大会◇  
6月1日、陸上競技大会が石岡運動公園陸上競技場で行われ、男子円盤投げに出場した小島谷勇輝君（3年）が、夏の全国大会出場の出場権を手に入れました。



な資質・能力が必要か考えよう」、「男女共生社会は当たり前！世界のパートナーシップを高めたい」、「社会人として幸せな人生を送るために基礎的な資質を高めよう」というテーマでお話を頂きました。生徒たちそれぞれが、社会情勢や未来を踏まえた上で、起業計画を立案し、評価していただくということにもチャレンジしました。

保健体育科  
教諭 荒木 理行（高57回）  
体育科には現在、高校4名、附属中2名の計6名が勤務しております。土浦一高の体育といえは「高体操」。その高体操は附属中生から学び始め、高校進学後は内進生が高入生に教えるシステムで動いております。体力テスト、一

## 職員室だより

◇おわりに◇  
本校定時制は、昭和23年に発足し、県内の定時制の中で最も長い77年の歴史をもちます。生徒数は現在、1学年から4学年あわせて103名が在籍しています。これは、県内の夜間部の中で最も生徒数の多い定時制になります。近年、通信制高校を積極的に選ぶ人が急増している中で、本校定時制には地域からの高いニーズが寄せられています。私どもは、本校定時制に課せられた使命と責任とを全うしていかなければならないと感じております。

在校生では、大学進学希望者が増えています。大学進学や専門学校、就職、3年で卒業する「三修三卒」、希望者など、多様な進路に対応するため、進路セミナーの実施、就職希望者への面接指導など、生徒一人ひとりの希望に沿った、きめ細かな進路支援にも力を注いでいます。



高オリンピックなどの行事では、全学年で「高体操」を行う伝統が続いており、学校の一体感を感じることができそうです。

昨年度、長年使用してきたプールが老朽化により壊れてしまい、猛暑の中でも、体育の授業を工夫しながら行っていました。暑さ対策をしながら生徒の体力を育む。高体操の創始者、入江信太郎先生の言葉に「高は進学校だから、進学にはまず体力が基本」とありました。最後の最後まで、受験勉強を頑張り切れる精神力と体力とを育んでまいりたいと思います。

一高スタイルとして、今もなお大切にされている「あえて二兎を追え」。勉強と部活。勉強と委員会。とにかく全力で何事にも取り組む生徒が多いです。創立5年目になる附属中でも、土浦市の総体にて、陸上部個人優勝者5名、男子リレー優勝、軟式野球部優勝、女子バスケット部優勝と、見事に文武不岐を体現してくれています。今後も、生徒たちの活躍にご注目ください。



## 進路状況報告

東大14名（国公立全国20位）  
京大5名  
筑波大39名 東北大15名  
国公立大医学部医学科15名

進路指導部長 坂本 拓也  
（高40回）

今年度の大学入学共通テストは、新課程入試としては初めての実施となりましたが、「思考力・判断力・表現力を問う」という考え方に基づいた出題傾向は継続されています。注目された新教科の「情報」の平均点は約70点で、かなり取り組みやすい設問だったと思われまます。国公立大学志望者を中心とする6教科8科目（1,000点満点）の全国平均得点率は文系で+2.3ポイント、理系が+1.2ポイントと、昨年度からやや上昇しました。読み解く文章や資料の分量が近年増加傾向にありましたが、英語では全体で700語ほど語数が減少するなど、今年度は各教科とも比較的に取り組みやすい問題だった印象です。

国公立大学の志願者数は、全国で1.2%の増加となりました。共通テストの平均点上昇が大きな要因で、特に、比較的手堅い出願先である公立大を選択する傾向が見られました。

私立大学においては、一般選抜における出願者数が前年比107と大幅に増加しました。内訳は一般入試が104、共通テスト利用方式が112となつて

います。増加の背景としては、主に、①新課程入試初年度で、安全志向による併願校数の増加、②共通テストの平均点上昇により、併願校の追加出願が増加、③近年の主要大学の倍率低下による強気の出願傾向、といった要因が考えられます。

本校の合格状況については表の通りです。国立難関大学の合格者数は、北大4名、東北大15名、東大14名、一橋大1名、東京科学大2名、名大3名、京大5名、阪大2名、九大1名の合計47名で、1クラス減（学年7↓6クラス）の影響もあり、前年度からやや減少しましたが、大いに健闘したと言えます。合格者の多い大学は、筑波大39名、茨城大18名で、筑波大の現役合格者数は過去6年間で最多となっています。

医学部医学科については、今年度も国公立大学に15名の合格者を出すなど、着実な成果を上げました。推薦入試では、筑波大に6名、山形大に1名が合格しました。現役合格は12名で過去最多となり、既卒でも名古屋大、東北大にそれぞれ1名が合格しています。

新卒生の国公立大学合格者数は117名。現役進学率は約69%となりました。近年は既卒者となるのを避ける傾向が強まり、60%を超える進学率で推移しています。受験人口の減少や経済の低迷もあり、こうした傾向は今後も継続すると思われるが、生徒には、高い目標を持ち、強い意志を貫いて有意義な高校生活を送り、受験に臨んでほしいと思います。

## 令和7年度入試合格状況

## 国公立大学

大 学	合格者	新卒
旭川医科	1	1
北海道	4	2
東北	15	12
山形	2	2
福島	2	1
茨城	18	13
筑波	39	32
埼玉	2	1
千葉	5	4
お茶の水女子	5	5
電気通信	1	1
東京	14	12
東京外国語	1	1
東京学芸	2	1
東京科学	2	2
東京農工	2	1
一橋	1	1
横浜国立	2	2
新潟	2	2
信州	1	1
富山	1	1
金沢	1	1
静岡	1	1
浜松医科	1	1
名古屋	3	1
京都	5	4
京都工芸繊維	1	
大阪	2	2
奈良女子	1	1
島根	2	2
九州	1	1
宮崎	1	1
鹿児島	1	1
福島県立医科	1	1
茨城県立医療	1	1
東京都立	2	1
神奈川県立保健福祉	1	1
大阪公立	1	1
国公立合計	148	117

## 私立大学

大 学	合格者	新卒
青山学院	12	11
学習院	7	6
慶應義塾	13	8
芝浦工業	22	12
順天堂	5	3
上智	14	11
成蹊	5	2
成城	2	
専修	5	3
多摩美術	1	1
中央	42	30
津田塾	5	2
東京女子	2	
東京電機	9	
東京農業	11	3
東京薬科	4	1
東京理科	85	39
東邦	8	8
東洋	19	8
日本	19	14
日本女子	6	2
法政	32	18
武蔵野美術	13	11
明治	41	23
明治薬科	1	1
立教	25	22
早稲田	38	25
立命館	3	1
関西	1	1
その他	48	21
私立大学合計	498	287

## 大学校

大 学	合格者	新卒
防衛	1	1
防衛医科	1	
海上保安	1	1
大学校計	3	2

## 医学部医学科

大 学	合格者	新卒
旭川医科	1	1
東北	1	
山形	1	1
福島県立医科	1	1
筑波	6	5
浜松医科	1	1
名古屋	1	
島根	2	2
宮崎	1	1
東北医科薬科	2	
国際医療福祉	1	
獨協医科	1	
杏林	1	
自治医科	1	
順天堂	2	1
昭和医科	3	1
東京慈恵会医科	1	1
日本	1	
医学科計	28	15



進路指導室

令和6年度進修同窓会決算書

収入総額 12,390,334 円  
支出総額 9,262,602 円  
差引残額 3,127,732 円 (次年度へ繰越)

【収入】					単位：円
項 目	予算額	決算額	比較増減(△)	備 考	
1 繰 越 金	3,317,829	3,317,829	0	前年度繰越金	
2 終 身 会 費	60,000	483,000	423,000	13 名	
3 年 会 費	7,000,000	6,959,000	△ 410,000	2,152 名	
4 入 会 金	1,250,000	1,240,000	△ 10,000	新会員 計 248 名 × 5,000 円	
5 繰 入 金	0	0	0		
6 寄 付 金	0	389,703	389,703		
7 雑 収 入	171	802	631	預金利息	
合 計	11,628,000	12,390,334	762,334		
ご寄付者名		高14回卒業生ご一同・高26回卒業生ご一同・高36回卒業生ご一同・高14回卒石岡地区有志様・土浦三中支部様			

【支出】					(残額欄の△は決算額が予算額を超過していることを示す。)
項 目	予算額	決算額	残 額	備 考	
1 総 会 補 助	400,000	419,753	△ 19,753	総会資料、会場設営等	
2 会 報 発 行 費	3,400,000	3,543,837	△ 143,837	会報印刷、発送	
3 通 信 費	200,000	43,163	156,837	切手、はがき	
4 卒 業 記 念 品 費	250,000	285,200	△ 35,200	卒業証書ホルダー	
5 卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品代	
6 会 議 費	350,000	243,020	106,980	役員会、評議員会経費	
7 支 部 連 絡 費	350,000	220,000	130,000	支部会補助	
8 生 徒 奨 励 費	1,200,000	1,100,000	100,000	生徒会補助	
9 生徒活動補助費	800,000	358,318	441,682	各部活動用品	
10 別 途 積 立 金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立金会計へ	
11 慶 弔 費	100,000	0	100,000		
12 事 務 局 費	1,000,000	926,567	73,433	担当者手当、郵便振替手数料等	
13 旧本館活用事業費	920,000	140,236	779,764	事務用品・旧本館公開準備経費	
14 海外研修旅費	1,000,000	482,508	517,492	海外研修修経費	
15 予 備 費	158,000	0	158,000		
合 計	11,628,000	9,262,602	2,365,398		

上記のとおり決算しました。

令和7年3月10日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 小野 治

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

令和7年3月10日

監事 草薙宏明 印

監事 鴻巣 茂 印

監事 杉山 博 印



令和7年度進修同窓会予算書

収入総額 12,603,000 円  
支出総額 12,603,000 円  
差引残額 0 円

【収入】					単位：円
項 目	予算額	前年度予算額	比較残額(△)	備 考	
1 繰 越 金	3,127,732	3,317,829	△ 190,097	前年度繰越金	
2 終 身 会 費	60,000	60,000	0		
3 年 会 費	7,000,000	7,000,000	0		
4 入 会 金	1,265,000	1,250,000	15,000	253 名 (全 236 ・ 定 17) × 5,000 円	
5 繰 入 金	1,150,000	0	1,150,000	別途積立金会計から	
6 雑 収 入	268	171	97	預金利息	
合 計	12,603,000	11,628,000	975,000		

【支出】					
項 目	予算額	前年度予算額	比較残額(△)	備 考	
1 総 会 補 助	450,000	400,000	50,000	資料、会場設営等	
2 会 報 発 行 費	3,600,000	3,400,000	200,000	会報印刷、送料	
3 通 信 費	100,000	200,000	△ 100,000	切手、はがき等	
4 卒 業 記 念 品 費	300,000	250,000	50,000	卒業証書用ホルダー	
5 卒業周年記念品費	300,000	500,000	△ 200,000	卒業周年記念品代	
6 会 議 費	350,000	350,000	0	役員会、評議員会等経費	
7 支 部 連 絡 費	350,000	350,000	0	支部会補助	
8 生 徒 奨 励 費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助、生徒会活動功労賞	
9 生徒活動補助費	800,000	800,000	0	部活動補助	
10 別 途 積 立 金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立金会計へ	
11 慶 弔 費	100,000	100,000	0	香料、弔電	
12 事 務 局 費	1,000,000	1,000,000	0	担当者手当、郵便振替手数料等	
13 旧本館活用事業費	1,950,000	920,000	1,030,000	旧本館公開経費、展示ケース台整備	
14 海外研修旅費	800,000	1,000,000	△ 200,000	生徒海外研修引率旅費補助 グローバル基金補助	
15 予 備 費	303,000	158,000	145,000		
合 計	12,603,000	11,628,000	975,000		

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

令和7年4月26日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長

進修同窓会会報82号

発行日 令和7年12月1日

会報編集委員会

委員長 武井 秀一 (高23回)

委 員 飯村 弘 (高5回)

櫻井 忠男 (定53回)

竹井 茂雄 (高19回)

原田 晋市 (高20回)

鴻巣 茂 (高21回)

豊崎 利明 (高25回)

櫻井 浩 (高27回)

大久保 彰 (高29回)

江田麻裕子 (高34回)

大久保 博 (高37回)

校 内 日向 久 (副校長・高36回)

小松崎 理 (全日教頭・高45回)

町田 徳雄 (定時教頭)

浅野 洋平 (中学教頭)

諸岡 重彰 (事務室長)

飯島 一也 (高38回)

編集後記

同窓会会報第82号をお手に取っていただき、ありがとうございます。▼本号では、「母校だより」の分量を増やし、母校の様子をリアルにお届けできるようにいたしました▼本年度は、附属中1期生が合流した高校2年次において、土浦一高初の海外修学旅行、探究改革が実施されました▼普通教室改装工事、百三十周年記念式典・記念講演会の準備にも着手されました▼伝統と革新の道を歩み続ける母校に誇りを感じつつ、本誌をお届けします。(飯島)

住所変更手続きのお願い

住所や電話番号等を変更された方は、左記のEメールへ送信下さい。又同窓会会員名簿の不明者欄に掲載されている知人や友人がおりましたら、当人に事務局へ連絡するようお願いいたしますよう、ご協力の程をよろしくお願いいたします。

進修同窓会事務局

Eメール shinsu@tsuchinai-hibked.jp

FAX 029-826-3521